藤原京二条大路の調査（第33－3次）

（昭和56年8月）

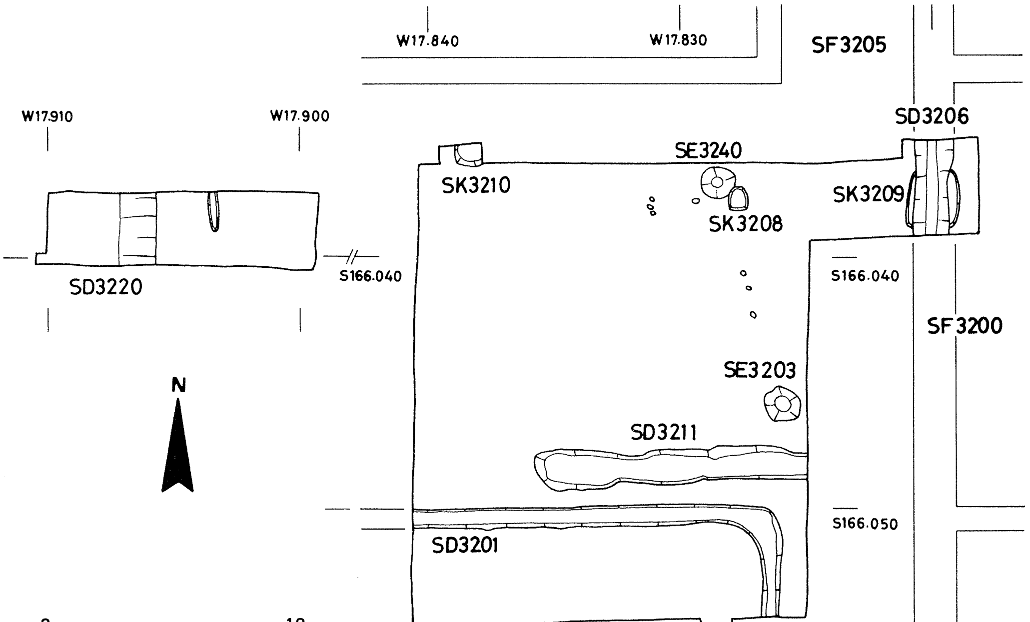
この調査は，橿原市醍醐町内での住宅新築工事に先立つ事前調査として実施したものである。調査地は大極殿の西北600 mにある東西に細長い水田で，北方130 mには「長谷田土檀」と俗称される土壇がある。東方170 mでは，礎石や法隆寺式軒瓦が発見されており，寺院址（醍醐廃寺）と推定されている。また，調査地は藤原京二条大路と右京二坊坊間路の想定位置にある。調査は二坊坊間路想定線に接して，東西15 m，南北18 mの調査区を設定し，のちに水田北沿いに幅4 mで東へ7 m分を拡張した（東区）。一方，この水田の西端が藤原宮西外濠の北延長線上にあたることから，西端に幅3 m，長さ11 mの東西トレンチを設けた（西区）。

東区での層序は，耕土，床土，灰褐色土，褐色粘土，黄褐色粘土であり，遺構は褐色粘土上面で検出した。ただし，灰褐色土は瓦器を含む多数の小溝の重複によって形成されたものである。井戸などの中世の遺構は灰褐色土上面から掘り込んでいる。遺構は藤原宮期の条坊遺構と中世の遺構，その他に分かれる。

南北溝ＳＤ3206は，右京二坊坊間路東側溝にあたる。幅1.6 m，深さ0.36 mの素掘り溝で，底には灰色砂・灰色粘土が堆積し，暗茶褐色砂土で埋められている。長さ3.6 mを検出したにとどまるが，灰色砂層からは7世紀後半から藤原宮期の土器および土馬が出土した。なお，この溝は中世の土壙ＳＫ3209に覆われており，その中から軒丸瓦6275Ｈが出土した。南北溝ＳＤ3207は幅0.7 m，深さ0.3 mの素掘り溝で，灰色粘土が堆積し，灰褐色砂質粘土で埋められている。調査区の南端から北へ3 mの所で直角に西折し，東西溝ＳＤ3201となる。ＳＤ3201は幅0.9m，深さ0.15 mと極めて浅く，灰色粘土が堆積している。前者が二坊坊間路（ＳＦ3205）の東側溝，後者が二条大路（ＳＦ3200）の南側溝にあたる。いずれも中世以前に相当の削平がなされたものと考えられる。

中世の遺構には，多数の東西・南北小溝のほかに井戸2基，土壙3基などが

あり，調査区の西北部には柱穴・小ピット群がある。井戸ＳＥ3203は調査区の東端にある素掘りの井戸で，径1.4ｍの円形で，深さは1.4ｍである。底は径0.7ｍと狭くなっている。埋土は５層に分かれ，上の２層が廃棄後に埋められた土とみられる。いずれの層にも瓦器が含まれているが，第３層には杓子などの木製品や竹材が多く，第４層には土師器皿が多い。灰褐色土の上面から掘り込んでおり，東西小溝より新しい。井戸の西に接して，径0.4ｍの範囲に焼土面がみられた。井戸との関係，性格は明らかでない。 調査区の北端にある井戸ＳＥ3204は円形の素掘り井戸で，径1.3ｍ，深さ2.5ｍ，底の径0.6ｍである。埋土は４層に分けられ，第１層の埋土に瓦器が，第２層に木質遺物のみられるほかは，全般に遺物は少ない。東西小溝と重複しており，東西小溝より新しい。土壙ＳＫ3209は，南北溝ＳＤ3206を覆う楕円形の浅い土壙で，幅２ｍ，長さ３ｍ以上を測る。東西小溝と重複しており，土壙の方が古い。土壙ＳＫ3208は，0.8～１ｍの楕円形で井戸ＳＥ3204と重複する。重複関係から，ＳＫ3209→東西小溝→ＳＫ3208→ＳＥ3204の順に作られたことが確認できる。 土壙ＳＫ3210は調査区の西北で検出した土壙で，幅0.8ｍ，長さ１ｍ以上の東西に長い長



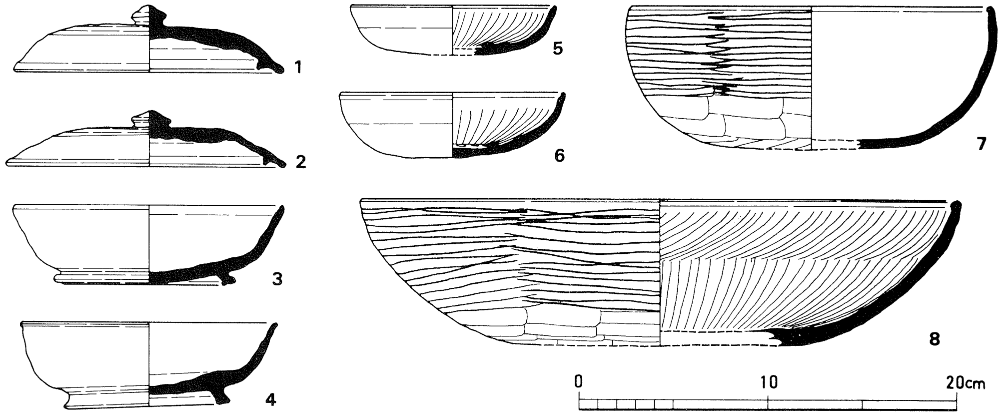
第33－３次調査遺構配置図（１：300）

方形を呈する。多量の炭を含む埋土からは，白磁・瓦器・土師器が出土した。井戸ＳＥ3204や土壙ＳＫ3208の周辺には，径0.25ｍの円形掘形の中に径9㎝の柱痕跡のある柱穴がいくつかある。埋土が先述の土壙と近似し，瓦器の小片を含む穴もあるので，井戸や土壙と同時に存在した建物とみられる。瓦器は調査区の東北部に濃密であり，醍醐町集落の北方に中世集落の一拠点が存在したものと考えておきたい。

その他の遺構には，東西溝ＳＤ3211，斜行溝ＳＤ3212がある。東西溝ＳＤ3211は，幅1.5ｍ，深さ0.5ｍの素掘り溝で，調査区東端から11ｍの位置で途切れている。埋土から弥生土器が出土したが，時期については疑問が残る。斜行溝ＳＤ3212は調査区の西南部にある幅1.2ｍの素掘り溝で，灰色粗砂が堆積している。ＳＤ3201よりも古く，弥生時代の自然流路であろう。なお，褐色粘土層からは弥生時代のサヌカイト剥片が出土している。

西区では，西端で南北溝ＳＤ3220を検出した。この溝は二坊坊間路東側溝の西80ｍにある。幅4.4ｍ，深さ0.7ｍで，埋土からは磨滅した瓦・土器片が少量出土した。西外濠は，従来の調査成果（第23－5次・第34次調査，概報10・本概報）によれば幅約10ｍ，深さ1.5ｍの大溝で，藤原宮廃絶後，奈良・平安時代を通じて周辺地域の基幹水路として機能していたことが明らかになっている。そして，ＳＤ3220とは規模・埋土ともに様相が異なっており，両者を一連のものとみるのは疑問である。周辺地形からみて，外濠を利用した基幹水路は北外濠との合流点で西方へ曲がって流れるものと考えられる。

東区出土の遺物には，瓦類・土器類・土製品・木製品がある。瓦類は極く少量であり，いずれも藤原宮に関わるものである。土器類では，条坊側溝と井戸・土壙から出土したものが比較的まとまっている。二坊坊間路東側溝ＳＤ3206出土土器（1～8）は，多くが7世紀後半代の特徴を示しているが，藤原宮期とみられるもの（3・5）がある。これは条坊の設置が天武朝末年に遡るとする第20次等の調査成果と矛盾しない。なお，溝内出土の土馬は面繋・尻繋などを竹管文で表現した好資料である。井戸ＳＥ3203・3204などから出土した瓦器はいずれも12世紀末から13世紀前葉の特徴を示すものである。



ＳＤ3206出土土器実測図

以上のように，本調査では当初の想定通り，二条大路・二坊坊間路を検出する成果を得た。ここではこれら条坊遺構について，二，三の問題にふれておきたい。二条大路と二坊坊間路の連接のしかたは右京での通例と同じく，西側の溝が ┤ 形に折れ，東側の溝は ├ 形に連なるものとみられる。二坊坊間路の幅員は，ＳＤ3206とＳＤ3207それぞれの延長線上で計測して溝心々距離6.5ｍである。二条大路については，その南側溝を検出しただけであり，北側溝は調査区の北に位置する。南側溝心から調査区北端までは約14.9ｍあり，二条大路の幅員は一応15ｍ以上とすることができる。二条大路については，奈良県教育委員会によって昭和42年度の調査で検出された４条の東西溝（ＳＤ153・154・148・150）のいずれか２条が，その側溝にあたると考えられる。東面北門地区の調査成果を参考にすれば，北面大垣から約63ｍの位置にあるＳＤ153が二条大路南側溝にあたるとみられる。北側溝としては，ＳＤ148・150のいずれかが考えられ，ＳＤ148をとれば道路幅員は15.8ｍ，ＳＤ150をとれば17.4ｍとなる。これまでの成果で，宮周囲の道路については南辺の六条大路が幅21ｍと他の大路より幅広いことが明らかにされている。二条大路も同様であったとするとＳＤ150を北側溝とみるのが妥当である。ＳＤ150の北2.1ｍにあるＳＡ155は，左京一条一坊二坪の南を画する塀にあたる遺構とみられ，この溝との位置関係もこれまでの成果（第５～９次・27－２次調査など）と同様であって，先述の推定と矛盾しないものである。